

## 価値形態論研究における混乱

——久留間氏の訂正をめぐって——

望 月 俊 昭

### 一 はじめに

このところ「価値形態」に関する研究がにわかに盛んになってきている。昨秋研究書が二冊——荒木勉夫著『資本論』と価値論』（荒木〔2〕）および武田信照著『価値形態と貨幣』（武田〔15〕）——出版され、また関根猪一郎氏によって時期別の文献一覧（関根〔14上〕）が作成された。関連文献の単なる網羅でなく時期別に区分されたこの文献一覧などは、それ自身研究段階が新たな節目をむかえたことを物語っている。これを作成する契機となったのは、おそらく久留間敏造氏の『貨幣論』（久留間〔11〕）であろう。同書は『価値形態論と交換過程論』（久留間〔10〕）における用語を訂正し、ここ数年来噴出してきた批判に答えたものである。

久留間氏による「価値物」・「価値体」の同一視——正確にはマルクスの術語「価値物 Wertding」の「価値体 価値形態論研究における混乱」

## 価値形態論研究における混乱

Wertkörper」との混同——をはじめて批判的に指摘したのは周知のとおり浅野敏氏（浅野〔3〕、〔4〕）である。昭和四十六年のことであるが、三年後に廣松渉氏がこれを高く評価（廣松〔7〕）したものの学会で論及されることはなかった。立場の相異にかかわらず同一視にもとづく理論がすでに形成されてしまっていたため、即座に対応することができなかったのであらう。昭和五十二年に山本広太郎氏によって再度取り上げられ（山本〔19〕）、以来「浅野・山本両氏の指摘」という形で論及されるようになる。山本氏の論稿は、久留間氏の用語法を誤りとしながら久留間理論は依然として正しいとするものであった。こうした立場からなる見解の登場をまっぴらして正面から論及されるに至るといった経緯は奇妙と言うほかない。ともあれ、浅野氏の指摘は事実上黙殺され、同じ用語で異なる内容を甲論乙駁するという事態が続いたのである。

久留間氏は過去の誤った用語法を単なるミスとして処理したが、「ミス」の訂正で済む問題でなかったことは、訂正そのものに対する批判をはじめとするその後の一連の研究動向がこれを示している。筆者はすでに、この訂正発表前に拙稿（望月〔13〕）で次の点を指摘しておいた。すなわち、用語の訂正では問題は解決しないこと、というのも、氏の用語法の誤りはマルクスの術語を誤解したことから生じたものであって、氏の理論すなわち「回りの道」論はマルクスの叙述の、したがってマルクスの理論そのものの誤解の上に成り立っているからであるということ、これである。この点は次号で詳細に論じるが、本稿では訂正に対する反応を術語の整理という観点から検討する。

## 二 「価値物」および「価値体」——学会の動向

〔I〕 訂正に対する疑問について

久留間氏による訂正は次のとおりである。

「価値体」あるいは「価値物として通用する物」と言うべきであったのを「価値物」と言ったのは多くのたいへんなミスでした。だから、これからどうぞそのように訂正して読んでいただきたいのです。ただ、この場合の多くの誤りは、もっぱら、「価値物」という言葉を多くの独自の意味に——すなわちマルクスが「価値体」と言っているのと同じ意味に——使っている点にあるのですから、「価値物」と言っているのを「価値体」と訂正して読んでもらいさえすればいいので、そのために議論の筋道に変化が生じるわけではありません。（久留間〔11〕、九九—一〇〇頁）

氏が旧著（久留間〔10〕）で使用した「価値物」は「価値体」の意味であった、という訂正である。ここで問題なのは、氏がマルクスの叙述の中の「価値物」を「価値体」と読み、つまり誤解していたということ、そしてその誤解が下地となって「回り道」論が編み出されたということである。訂正発表以前に、訂正によって問題が解決するか否かが問われたのもこの点をめぐってのことである。解決されなかったのが山本氏（山本〔19〕、〔20〕）であり、されないとしたのが筆者であった。久留間氏は今回の訂正で山本氏の論稿に言及していないが、用語の訂正による「回り道」論の修正補強は山本氏の見解に即した形で行なわれたと言える。

では、この訂正により実質的に修正されたのは何なのか。等価形態にある商品上着の「価値物 Wertding」と

等価形態論研究における混乱

### 価値形態論研究における混乱

しての規定が以前は「形態規定」とされていたのが今回の訂正によって「形態規定」でないとした点である。氏がかつて力説していたのは、上着がリンネルに等しいのだとされることによって上着に「価値物としての形態規定性」（久留間「10」、六四頁）が与えられるということ、この規定が「一つの経済的形態規定性」（同、八頁）であるということであった。ということはつまり、久留間氏はマルクスの叙述に登場する上着の「価値物 Wertding」としての規定を「形態規定」と解していたということ、この解釈をもとにマルクスの叙述を引用、解説していたことを意味する。氏の「回り道」論の核心をなすこの点について、氏はさりげなく次のように修正している。

上着が価値物としての規定性において、等置される……。これによって上着は価値体としての形態規定性を与えられることになる……。 （久留間「11」、一〇四頁——強調は氏自身のもの、以下とくに断らない場合も同上）

「価値体」が「形態規定性」とされているのに対し「価値物」はただの「規定性」に修正されたのである。これは同書で一貫している。「相対的価値形態の内実」の項の第三および第五パラグラフ（Ka. 『現行版』S.64-65）に登場する「価値物 Wertding」を「形態規定」と解したがこれは誤りであった、という訂正である。<sup>(1)</sup>したがって、あえて繰り返すが、両パラグラフ中の同術語に関する誤解からなる氏の「回り道」解釈が「内容上からいえば全く正しかったのである」（山本「19」、六七頁）とか、「訂正して読んでもらいさえすればいい」（久留間「11」、一〇〇頁）等として済む問題ではないのである。<sup>(2)</sup> 両パラグラフに関する久留間氏の解釈、つまり氏の「回り道」論

が意味をなさないものになるのではないかという疑問が当然生じてくる。この点に関しては逆に、そうした疑問を封じることがねらった反論が現われた。つまり、久留間氏の「回り道」論が正しいとすれば、いや正しいのであるから、そのような訂正は許されないという反論である。研究会での発言という形式で富塚良三氏は久留間氏の訂正を次のように批判する。

……わたくしは、価値表現の「回り道」に関する久留間説を高く評価したいと考えているわけです。しかしそれだけにまた……「価値物」概念に関する今回の訂正は《Unweg》の論理を却って混濁させるものとして、それに疑問を表現せざるをえないと考えている次第です。率直に言わせていただくなれば、今回の訂正こそが「大変なミス」だったようにおもわれてなりません。（富塚〔16〕、三三四頁）

富塚氏によれば、今回の久留間氏のように訂正してしまうと「価値形態論の肝心要の点が見失われることになる」（同、三一七頁）。また、「価値物」・「価値体」の違いは「言葉のニュアンス」（同、三一九頁）の問題、つまり、「手でつかめるその現物形態で価値を表わす物」（Ka.『現行版』S.66）を指すには「価値体」より「価値物」のほうが「どうもびったりくる」（富塚〔16〕、三一九頁）といった語感の問題に属することになってしまう<sup>(3)</sup>。

すでに拙稿（望月〔13〕、九六頁）で示したように、「価値物 Werding」とは「価値である物 Ding, das Wert ist」を意味する。それが「手でつかめるその現物形態で価値を表わす物」、「価値の姿態」、「価値の現象形態」等を意味しないことは拙稿も含めた複数の諸研究によってすでに検証されている。

価値形態論研究における混乱

富塚氏は第三パラグラフの叙述を解説して次のように言う。「この連関、この関係においては、上衣は、『価値の現存形態 (Existenzform)』として、『価値物 (Wertding)』として、すなわち、『手でつかめるその自然形態で価値を表わす物』、『資本論』Ⅰ、六六ページ)として、gelten する」(富塚〔16〕、三二二頁)と。「すなわち」以下は氏が付け加えたものである。福原好喜氏が的確に指摘しているとおり、マルクスの叙述を引用、解説するにあたって「全く異なった規定をあたかもマルクスがそう述べているかの如く並置して文章を作っている」(福原〔6〕、一四三頁)。「全く異なった規定」か否かは判断の違いであるから別問題としても、その判断を下そうとするまさにそのときに、比較されるべき両規定が同義なものとして並置され、そして検討の対象とされている箇所以外から別の叙述が持ち込まれている。つまり、「マルクスの文章そのものの充分な検討」(富塚〔16〕、三〇三頁)のはずが、実際なされているのは「価値物」を富塚氏流に、すなわち旧久留間氏流に解釈すればマルクスの叙述がどう読めるか、ということなのである。

久留間氏の「回り道」論における問題意識は、富塚氏も言うように「『回り道』の構造、『回り道』の回り方をわれわれは微細にかつ明確に把握しなければならない」(富塚〔16〕、三二八頁)ということであったが、それは、『価値物』の概念をその独自性において把握(同、三二七頁)することによってのみ、可能だったのである。そこで、今回の訂正に対する富塚氏の批判がそれ自身で明らかにしたことは以下のことであろう。すなわち、第三および第五パラグラフに関する久留間氏の解釈とそれに依拠した「回り道」論は、「価値物」・「価値体」の区別とは両立しえないということ、言いかえれば、もし今回の訂正が正しいとすれば「回り道」論は意味をなさないものになるということ、これである<sup>(4)</sup>。

武田信照氏も今回の訂正については慎重に検討すべきだとして次のように言う。

ところで久留間氏はこの「価値物」を「価値体」と置き換えられたのであるが、この点には直ちに同意するわけにはいかない。マルクスにおいて、「価値体」に「抽象的人間的労働の直接的物質化」という規定が与えられているのかどうか疑問が残るからである。（武田〔15〕、三八一頁）

武田氏は、久留間氏の「訂正」に対する富塚氏の批判にふれて、この「疑問が残る」理由を二点挙げている。第一に「価値体」という術語がフランス語版で消失しているということ、第二に、マルクスが『『価値体』をたんに『人間労働の物質化 [Materiatur]』(K1, S. 58. 訳(1)九八頁)として——『抽象的人間労働の直接的物質化 [unmittelbare Materiatur]』(K1 [14], S. 18. 訳四八頁)としてではなく——規定している」(同、一八九頁)ということ、この二点である。

マルクスはたしかに「価値体としての、人間労働の物質化としての商品 B die Ware B als Wertkörper... als Materiatur menschlicher Arbeit」(Ka.『現行版』S. 67)としている。『現行版』におけるこの表現は『初版』における次の表現「すなわち『抽象的人間労働の直接的物質化としての上着物質 das Rockmaterial als unmittelbare Materiatur abstrakter menschlicher Arbeit』(Ka.『初版』S. 18)という表現と異なって、『直接的 unmittelbar』という形用詞が付されていない。武田氏がこれを引用する際、『直接的物質化』というように「直接的」にだけ強調符をつけるのは、この形容詞の有無を決定的なものとみなすとい

うことである。しかし、これは形式的に過ぎると言わざるをえない。もちろん、マルクスにとって「直接的」という一語の有無が決定的な意味をもつ場合もある。取りたてて論じるまでもなく「社会的な労働」と「直接的に社会的な労働」、「交換可能性」と「直接的交換可能性」等の場合がそれにあたる。では、この点にあくまで従うとすれば、つまり「直接的」なる形容詞の有無を常に決定的なものとする、次のような場合どのように理解すればよいのであろうか。マルクスは「一般的な相対的な価値形態」を論じる場合「一般的な等価形態」にあるリンネルを織る労働が「抽象的人間労働の直接的で一般的な現象形態 die unmittelbare und allgemeine Erscheinungsform」(Ka.『初版』S.33)となるとしている。「一般的」価値形態に対応して「一般的」現象形態とされていることは言うまでもない。ここで武田氏に従えば「直接的な……現象形態」とそれとは区別されるただの「現象形態」があることになる。<sup>(5)</sup>むしろ不必要なこの形容詞は『現行版』では削除されている。すなわち、一般的等価物としてのリンネルを織る労働・織布は「人間労働一般の一般的な現象形態 allgemeine Erscheinungsform」(Ka.『現行版』S.81)とされている。そしてこの点は『初版』についても同様で、このリンネルは「価値の現象形態としては、一般的な等価物、一般的な価値肉体、抽象的人間労働の一般的な物質化 allgemeine Materialiatur」(Ka.『初版』S.27)とされている。つまり、「単純な価値形態」における等価物であれば「価値肉体」すなわち「抽象的人間労働の物質化 Materiatur」なのである。「直接的」なる形容詞が無くても、まさに「価値肉体 Werhleib」——これこそ「価値体 Wertkörper」と同義であろう——とされているのである。「価値の妥当な現象形態」または、抽象的な、したがってまた同等な人間労働の物質化 Materiatur」(Ka.『初版』S.51; Ka.『現行版』S.104)とマルクスが言う場合も同様である。こうした表現で論じられているのは抽象的人間労働の「感



覚的に手でつかめる対象性」(Ka.『初版』S.18)についてである。學術語としては一見そぐわない「価値—肉体 Leib」、「価値—体 Körper」等の造語が使われているのも、まさにこの点を強調するためであったと言えよう。

抽象的人間労働の「直接的な現象形態」、「感覚的な現象形態」等の表現についても、また抽象的人間労働の「直接的な物質化」という表現についても、マルクスの意図を汲み取るべきであって、修飾語の有無で杓子定規に内容を判断すべきではない。<sup>(6)</sup>武田氏の主張に従えば、「価値肉体」、「価値の妥当な現象形態」等の表現に並置されているのがたんなる「物質化」であるのは疑問だということになる。さらには、マルクスは混乱しているとさえ言うことになる。氏が仮にそう言うのであれば一貫性がある。ところが武田氏はこれをマルクスの混乱とせず久留間氏の混乱とするのである。久留間氏の「『価値体』概念の混乱」(武田〔15〕、三八〇頁)は武田氏によればこうである。

氏は先の著作においても今回の著作においても、「価値体」として意義をもつ上衣を一方では「抽象的人間の労働の体化物」(たとえば(1)八頁)と規定されると同時に、他方では「抽象的人間の労働の直接的体化物」(たとえば同上五六頁)と規定されている。しかし実は前者は商品一般に妥当する規定であり、後者だけが「価値体」としての商品に妥当する規定である。だから「直接的」という形容の有無は、価値(物)と「価値体」との質的区別を強調される氏にとっては、大変重要な意味をもっているはずである。にもかかわらず、相異なる二つの規定が不用意に混在していることは不可解でさえある。この混乱は是正されなければならない。(武田〔15〕、三八〇頁)

### 価値形態論研究における混乱

武田氏はここで、マルクスによれば「抽象的人間的労働の直接な体化物」という規定だけが「『価値体』としての商品に妥当する規定である」と言う。しかし他方では、すでに見たとおり「抽象的人間的労働の体化物」をマルクスは「価値体」としてはいないかと指摘する。これを「混乱」とするならば久留間氏のそれとなくマルクスの混乱ではないか。久留間氏はマルクスに従ったまでのことである。武田氏の言う「相異なる二つの規定が不用意に混在している」のはマルクスであるのに氏は言わばその責任を久留間氏に押しつけているのである。

しかし、これは混乱ではない。二つの表現の内容は同一である。<sup>(?)</sup>「前者は商品一般に妥当する規定」という武田氏の見解が誤解の出発点である。「単純な価値形態」の中で「人間労働の物質化 *Materiatur*」、「抽象的人間労働の物体化 *Verkörperung*」(Ka. 『初版』「付録」S. 768; Ka. 『現行版』S. 72 usw.)とされているのは、等価値形態にある上着のみであって、「商品一般に妥当する規定」ではない。相対的価値形態にあるリンネルもそうであるなことは、マルクスはどこでも言っていない。「価値形態」論の中で独自の意味を与えられている「物質化 *Materiatur*」および「物体化 *Verkörperung*」を「対象化 *Vergegenständlichung*」<sup>(8)</sup>と同一視すれば、武田氏のように「直接的な」の一語の有無ですべてを判別せざるを得ないのである。

フランス語版に「価値体 *Wertkörper*」に対応する術語が登場しないという点については、なお検討を要する。ドイツ語版の「価値形態」論における論理性がフランス語版にそのまま生かされているか否かということも含めて別に検討しなければならない。筆者はかねてより「価値物」・「価値体」の区別を強調してきたが、この二つの術語なしに「価値形態」を論じることができないと考えるわけではない。拙稿(望月〔13〕)でふれたように、同一視の長い歴史がなければ、そして同一視がもたらす誤った解釈とそれに端を発した「回り道」論論争史

がなければ、術語としての両者の区別<sup>(9)</sup>をことさら声高に指摘にする必要はなかったのである。『初版』『本文』の「価値形態」論は、いわゆる「価値表現のメカニズム」をマルクスがはじめて説明したものであるが、その叙述の仕方は別として、内容的には『現行版』のそれと基本的に同一である。それを論じ尽くしていると見てよい叙述には、周知のとおり「価値物」という術語は登場しないのであり「価値体」もいわゆるキーワードとして用いられているわけではない。武田氏は「価値体」に関してのみ「このカテゴリーがフランス語版では消失している」(武田〔15〕、一八九頁)ことを指摘する。「価値物」の方はどうか。氏が考察の中心に据えるのは「価値表現のいかんにしてを説明している第三パラグラフ」(同、一八四頁)であるが、まさにそこに登場する「価値物 Wertung」はフランス語版の同パラグラフには訳出されていないのである。

「価値物」・「価値体」の区別について誤解されてはならないのは、その各々が語る内容の区別こそが重要なのであって、両者が術語そのものとして不可欠というわけではないということである。

『初版』および『初版』『付録』における区別は以下のとおりである。

基本的な区別は「価値」と「価値形態」(または「価値形態」)との区別、すなわち、「価値として意義をもつ」(Ka.『初版』「付録」S.76r)という規定と「価値の形態として意義をもつ」(ebenda)という規定との区別である。後者を「価値形態」なる表現を使わずに論じる場合、すなわち「価値」という術語のみで表現する場合、『初版』でマルクスは「リンネルにとって現物形態における価値として意義をもつ」(Ka.『初版』S.18r)「その物的な姿において、その使用形態において、他の商品に対して価値として意義をもつ」(ebenda, S.17)と言う。これと同じことを『初版』『付録』では、「それ自身の物体形態または現物形態が他の商品に対して、……価値形態として

価値形態論研究における混乱

意義をもつ」(Ka.『初版』「付録」S.768)と言う。いずれの場合も、現物形態がいかなるものとして意義をもつかを論じるとき、マルクスはおおむね「他商品に対して」、「他商品にとって」、「他商品のための」——*ander Waare; ander Waare gegenüber; für andre Waare; um andre Waare* (vgl. Ka.『初版』S.17-8; Ka.『初版』「付録」S.768, 772, 775 usw.)と言う。ここで銘記すべきは、この規定は他の商品に対して(他の商品にとって、他の商品のための)とされているのであって、他の商品の、とされているのではないという点である。誤解をおそれずポイントを示せば次のようになろう。

[C]	[B]	[A]
R	R	R
∴ L の Wf (Wg) としてゲルテン	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> R の Nf  ∴ L に対して Wf (Wg) としてゲルテン </div>	∴ W としてゲルテン
R	上着	
L	リンネル	
W	価値	
Wf	価値形態	
Wg	価値姿態	
Nf	現物形態	

この場合[A]が「価値物」としての規定に、[B]が「価値体」としての規定に対応する。考察すべきは、第一に、[A]と[B]との違いは何か、「他の商品に対して」とされる[B]は方法論的に[A]と何が異なるのかということ、そして第二に、[B]と[C]との違いは何か、「他の商品に対して」と「他の商品の」とは方法論的に何が異なるのかということである。この点については別の機会に論じる予定である。[B]・[C]を混同してマルクスに対し、あるいは久留間氏に対し同義反復と批判する見解については次号で取り扱う。

## 〔Ⅱ〕 「形態規定」に関する議論について

ところで、先にもふれたとおり、久留間氏の「回り道」論の核心をなしていたのは、等価物商品上着の「価値物 Wetting」としての規定が「形態規定」だという点であった。これに対しては、上着は「はじめから価値物」であるという批判が相次いだ。<sup>(10)</sup> 上着は等置されることによって「価値物」になるのか、はじめから「価値物」として等置されるのか——この議論は、「価値物」・「価値体」を区別せよという浅野氏の指摘を無視する形で進められてきたため、すれ違いのままであった。しかし、久留間氏の言う「価値物」が「価値体」を意味することが明確になった段階では、この問題は次のように分化した。すなわち、第一に、どのようにして上着は「価値体」という「形態規定性」を受けとるのかという問題。そして第二に、それとは区別される上着の「価値物」としての規定は「形態規定」か否か、という問題にである。つまり、はじめから「価値物」か否かという問題はこのような、とくに後者のような形で問い直されることになったのである。この点に関して対立する諸見解は以下のように整理することができる。

第一に、久留間氏による訂正。かつて「形態規定」とされていた「価値物」は今回の訂正によって「形態規定」でないとされる。氏がそう明言しているわけではないが、少なくとも「形態規定」とされてはいない。常に「形態規定」とされる「価値体」と異なっていた「規定性」とされているにすぎない。そこで当然問題になるのは、この言わばただの「規定性」とは何かということである。

第二に、富塚氏による反論。「価値物」・「価値体」の区別自体が誤りであり、「価値物」が「形態規定」ということがまさに決定的に重要なのだという反論である。これは、以前の久留間理論そのものである。「価値物」が

## 価値形態論研究における混乱

「形態規定」でないとしたら「回り道」論は意味をなさないものとなるということを、この見解は示している。

第三に、両氏の見解に対する反応。「価値物」・「価値体」の区別に異論がないとする見解もこの点については意見が分れる。このうち、「価値物」が「形態規定」でないとする見解は大方の受け入れるところであろう。これに対し、「価値物」は「価値体」と区別すべきだがやはり「形態規定」であるという見解は特異なものである。山内清氏のこのような見解は新たな問題提起であるということができる。

久留間氏はこの点については巧みに素通りしてしまった。しかし、氏による訂正が意味するところは明白である。第一に、事実として、「回り道」論はマルクスの叙述にある「価値物」が「形態規定性」であるとの理解のもとに構成されたものであるということ、第二に、その「価値物」を「形態規定性」と解したのは——この言葉の使い方の問題ではない——誤りであった、という内容の訂正である。この訂正を図式的に示せば次のようになる。

(訂正前)	
「価値」	
「価値形態」・「価値姿態」・「価値体」	∴ 形態規定
「価値」・「価値物」	
「価値形態」・「価値姿態」・「価値体」	∴ 形態規定
(訂正後)	

久留間氏が明言していないとはいえ、氏による訂正の含意は「価値物」が「形態規定性」でなかったという点にあったのである。氏がこの点にふれていないのは、富塚氏の反論が示すようにそれが氏の「回り道」論の死活問題だからであろう。だが久留間氏の言いまわしがどうあれ、問題状況は上述のとおりである。

この点を正面から取り上げているものとして特筆すべきは山内清氏の見解である。氏の見解で眼をひくのは、氏が「価値物」・「価値体」の区別を支持しながら、なお「価値物」が「形態規定」であるとしている点である。氏は武田氏によるその「形態規定性」の否定を批判し、かつ久留間氏による訂正にふれて次のように述べている。

しかし、論争の過程を通じて……価値関係の内部ではじめて生じる「価値物」範疇の形態规定的性格の指摘は、新久留間説の多少の不明確さにもかかわらず、批判をはねのけるだけの説得力をもつものであることも確認されている。(山内「21」、四九頁)

山内氏は従来の諸研究が「価値物」の「形態規定性」を否定してきたことを批判する。「価値物」・「価値体」を区別して論じている諸研究も「その(『価値物』の——引用者)形態規定性を否定してしまったため、結局、価値物＝価値にならざるを得ず、価値表現メカニズムの中での『価値物』範疇の意義を説明できないで終わってしまった」(同、五一頁)ことになる。ここで問題なのは次の諸点である。第一に、山内氏は何を論拠に「価値物」が「形態規定」であるとするのか、第二に、氏は「価値物」規定の内容をどのようにとらえているのか。このうち、後者が特に問題である。山内氏は「価値物」を次のようにとらえている。

筆者の「価値物」規定は、《その自然形態がそのまま価値対象性を示すもの》とする。注意してほしいのは、価値形態論研究における混乱

#### 価値形態論研究における混乱

「価値体」規定は、等価物商品だけに適用され、その自然形態はそのまま他商品（相対的価値形態商品）の価値を表現するのであるが、「価値物」規定は、等価物商品にも相対的価値形態商品にも適用でき、それぞれの商品の自然形態はそのまま両商品に共通な価値対象性を示す点である。すなわち、「価値物」で対象的に示される価値は相対的価値形態商品の価値という特定されたものではなく、「社会的に同等な価値対象性」……の《価値》一般である。（同、五一―五二頁）

この叙述に示されている山内氏の諸規定には種々の問題が錯綜している。とりわけここで問題なのは「価値物」が《自然形態がそのまま価値対象性を示すもの》とされている点である。山内氏が「筆者の……規定」と表明しているように、この規定は氏独自のものである。そして、マルクスがどこでどのようにして、氏の言う「《その自然形態がそのまま価値対象性を示すもの》」という意味で「価値物」という術語を用いているかは、氏によって示されていない。氏はこの規定を導き出すために「価値物」と「価値対象性」との関連について論じるが、その条りにも、またそこで引用されているマルクスの叙述にも「《その自然形態がそのまま……示す》」という内容が含まれていない。したがって、氏の「価値物」規定と「《その自然形態がそのまま……示す》」という内容とがどこでどのように結びつくのかは不明である。他の箇所は、富塚氏の場合と同様、そのようなものとして規定すればマルクスの叙述はどう理解されるかという議論である。

氏によれば、第一に、リンネルに等置された上着は「価値物」という「形態規定」を与えられ、第二に、その上着と関係しているリンネルも「価値物」という「形態規定」を与えられる。すなわち「それ自身《その自然形



態がそのまま価値対象性を示すもの」という規定をうけとる」(同、五三頁)ことになる。このような解釈は、マルクスの叙述の内容とはあまりにも違う。マルクスは「現物形態(自然形態) Naturalform」の役割を次のように論じる。すなわち、「手でつかめるその現物形態で価値を表わしている物」(Ka. 『現行版』S. 66)という意味において上着の「現物形態はただ価値形態または価値の姿としてのみ意義をもつ」(ebenda, S. 75)のに対し、リンネルの「現物形態はただ使用価値の姿としてのみ意義をもつ」(ebenda)と。マルクスは、リンネルの「現物形態」がそのまま価値として意義をもつとは言わない。また、そのまま価値を示すとも、そのまま価値対象性を示すとも言わないのである<sup>(11)</sup>。

山内氏は、「価値物」・「価値体」の区別を論じた従来の諸研究(浅野〔3〕、山本〔19〕等)では「価値物」＝「価値」にならざるをえないと批判する。しかし、これはマルクスの用語にならったまでのことであってそれら諸研究の独創ではない。それらの諸研究が検討の対象としてきたマルクスの叙述を氏はどう見るのであろうか。たとえば『初版』『付録』においてマルクスが「一つの価値物としての上着」を言いかえて——『資本論』ではじめてこの場所が使われたまさにその術語を言いかえて——「価値としての上着」(Ka. 『初版』『付録』S. 76)としている箇所、これを、どのように考えるのであろうか。氏の見解に従えば、この「価値としての上着」は「その自然形態がそのまま価値対象性を示すもの」としての上着ということにならう。となれば、「価値」が「その自然形態がそのまま価値対象性を示すもの」ということになってしま<sup>(12)</sup>う。「価値物としての上着」と「価値としての上着」がともに「形態規定」であるとするば問題は解消するが、氏によればそうではない。「価値物」＝「価値」とすれば「マルクスが価値形態論の第二版改訂の際、『初版』本文にはなかった『価値物』範疇をわざわざ

価値形態論研究における混乱

採用した理由が謎となる」(山内「21」、五〇頁)と氏は言う。では、この術語が用いられていなかった『初版』本文「およびわずかに一度唐突に用いられたにすぎない「付録」については、氏の言う「価値表現メカニズムにおける『価値物』範疇の独自の積極的な意味」(同上)はどこへいつてしまうのであろうか。『初版』本文「および「付録」がこの点で論じるに値いしないとするのであれば一貫しているが、逆に氏は、その「独自の…意味」を明らかにするために積極的にそこから引用するのである。

「価値物」・「価値体」を正当にも区別した諸研究が「価値物≡価値」(山内「21」、五一頁)となってしまうのは、山内氏によれば「価値物」の「形態規定性を否定してしまったため」(同上)であるとされる。そして氏が「価値物」を「形態規定」とみなす理由としては、それが「等置関係の結果」(同、四八頁)与えられる規定だという点が指摘される。この規定は、氏によれば「諸商品の社会的過程である価値関係の内部でのみ」(同、四七頁)生じる規定だから「形態規定」なのだとされている。ここには一つの混乱がある。

拙稿ですでに論じたように、等価物商品上着に関しては次の諸規定がある。(I)と(II)には区別はない。

(I) [A] リンネルと「同じ性質の物」<sup>デインク</sup>として意義をもつ。

[B] 「価値物」<sup>ディンク</sup>として意義をもつ。

[C] 「価値体」<sup>ケルバー</sup>として意義をもつ。

[D] その身体はリンネルの価値を表現する。<sup>ケルバー</sup>

(II) [A] リンネルと「質的に等しいもの」として意義をもつ。

〔B〕「価値」として意義をもつ。

〔C〕その現物形態が「価値形態」・「価値形態」として意義をもつ。

〔D〕その現物形態が「リンネルの価値形態」・「リンネルの価値形態」として意義をもつ。

これらはいずれもリンネルに等置されたものとしての上着に関する規定である。言いかえれば、リンネルとの関係の中にある上着に関する規定である。二〇エレのリンネルⅡ一着の上着 という等式の中でこそ、「同じ性質の物として意義をもつ」のであり、「価値物として意義をもつ」のである。その意味で山内氏が「価値として意義をもつ」および「価値物として意義をもつ」という規定を「形態規定」だとするのであれば、筆者としては異論はない。しかし山内氏の見解はこのようなものではない。氏は武田氏を批判して次のように言う。

これは事実上は上衣の価値物規定の発生を価値関係の内部に求めることを否定する見解である。しかしこの見解は、マルクスの「この関係〔Ⅱ等置関係―山内〕のなかでは、上衣は、価値の存在形態として、価値物として、意義をもつ」(K.I, S.64)や「上衣はリンネルとの価値関係のなかではそのそとでよりもより多くを意味している」(K.I, S.66)といった規定と明白に齟齬する。(同、四八頁)

山内氏が「価値物」Ⅱ「形態規定」なる主張を裏付けけるものとして引用する叙述はこれだけである。しかし、氏によって引用され並置されているこの二つの叙述はその内容を全く異にしているのである。

上着が「価値物」として意義をもつとする場合マルクスは「この関係の中では」と言うが「リンネルとの価値

価値形態論研究における混乱

### 価値形態論研究における混乱

関係の中では」と言わない。『初版』『付録』において「この関係（＝同源性関係——引用者）の中では価値として意義をもつ」（Ka.『初版』『付録』S.767）と言う場合も同様である。これは当然のことであって、同源性関係であることが示されたリンネルと上着との関係が実は価値関係（といっても両者が単に「価値である」という並列的な関係ではない）であることが論じられている部分だからである。したがって、リンネルとの価値関係の中で上着は「価値」として、または「価値物」として意義をもつと言え、これは事実上の同義反復である。これに対し、上着はほかならぬ「リンネルとの価値関係の中で」「価値体」として意義をもつ。言いかえれば、「そのそとでよりもより多く意味している」上着は「価値がそれにおいて現われる物、または手でつかめるその現物形態で価値を表わしている物」（Ka.『現行版』S.66）として意義をもつのである。「一つの新たな形態」（Ka.『初版』S.17）を刻印される上着、すなわちその使用価値が「一つの新しい役割を演じる」（ebenda, S.20）ものとしての上着こそ、「価値体」としての上着であり、リンネルとの価値関係の中でその外でよりもより多くを意味している上着なのである。これは、「価値物」としての上着ではない。マルクスの叙述から明らかのように、その「現物形態」の意味するところが新たに問われるのは「価値体」としての上着であって「価値物」としてのそれではない。山内氏は「『価値物』範疇の形態規定性か否かが問題になっている場合には、マルクスの叙述の順序に対する配慮も必要である」（山内「21」、四八頁）と言うが、まさにしかりである。この配慮があれば、「価値物」規定は「価値関係の内部ではじめて生じる」（同、四九頁）という見方が正確でないことが明らかであったと思われる。その「現物形態」が独自の役割を演じることによってリンネルとの価値関係の内部でその外でよりもより多くを意味することになる上着は、「価値物」としての上着とはあくまで区別されなければならないのである。

山内氏の「価値物」Ⅱ「形態規定」という主張に含まれる問題点は、富塚氏についてもあてはまる。久留間氏の訂正を支持するか批判するかという点で山内氏とは対立する富塚氏は次のように言う。「ところで、上衣が、『価値物』となり、『価値物』として *gegen* するのは、リンネルが上衣を等価物とするその価値関係のなかにおいてのみであります」（富塚〔16〕、三二六頁）と。上着が「価値物」として意義をもつのはリンネルとの価値関係の内部においてのみのことであるから、その意味において「価値物」は「形態規定」であるという視点、これは、「価値物」・「価値体」の無意識的な同一視の発生源の一つであったと思われる。ところが、まさに両者を区別すべきか否かが問題になっている現段階において、この同じ誤解が立場を異にする両氏によって繰り返されているのである。

藤本義昭氏も同様、「価値物」・「価値体」の区別を主張しつつ「価値物としての形態規定」（藤本〔5〕、一一頁）を論じていた。しかしすでに指摘したように（望月〔13〕、一一八頁）、氏はまさにマルクスの「価値体」の意味に「価値物」を解していた。「手でつかめるその現物形態で価値を表わす物」を「価値物」とし、「リンネルに対して価値を表わす物、すなわち価値物」（同、二九頁）というようにである。

「価値物」・「価値体」の区別の是非に関して一方の藤本氏はこれを肯定、他方の富塚氏はこれを否定する。ところが両氏の「価値物」規定とその「形態規定性」の主張は瓜二つである。また、先に見たとおり、久留間氏は訂正により「形態規定性」をもっぱら「価値体」に属するものとする一方、かつてあれほどその「形態規定性」を力説した「価値物」については一度も「形態規定性」と言わず、これをただの「規定性」としたのである。この訂正に関して、「価値物」を「形態規定」とする一方の富塚氏は、この訂正が「形態規定性」否定を意味する

#### 価値形態論研究における混乱

と解したからこそ全面的に訂正批判を展開したのであるが、他方の山内氏はこの訂正を「形態規定性」否定と見ないのである。事態はこのように混乱している。

福原好喜氏は富塚氏および藤本氏の「価値物」Ⅱ「形態規定」論を批判する際、「『価値物』は存在規定であって形態規定ではない」（福原〔6〕、一四五頁）と明言する。氏は「価値物自体は『刻印された新たな形態』ではない」（同、一四八頁）として次のように言う。

「価値体として *gelten* する」はこうした倒錯した事態について述べられているのに対して、「価値物として *gelten* する」はこれに対して至極当り前のノーマルな事態について述べられているのである。（同、一四四頁）

氏によれば「至極当り前のノーマルな事態」なのはそれが価値表現で「想定されている事態」（同、一五六頁）だからである。つまり「両商品（リンネルおよび上着——引用者）が価値物であることは価値表現の前提なのである」（同上）というのが氏の見解である。さらに氏は次のようにも言う。「『価値物として *gelten* する』と『価値物である』、あるいは『価値物となる』とは、又、全く次元の異なる世界の話である。読めば分るとおり前者は *gelten* する、即ち『意味を持つ』世界の話であり、後者は存在次元の話である」（同、一四四頁）と。ここで言われている「存在次元の話」と「存在規定」とは同じ内容を意味するのであろうか。もしそうであるならば、つまり、「価値物である」が「存在次元での話し」という意味で「存在規定」であるならば、それでは次元を異にする「価値物として *gelten*」は何なのであろうか。福原氏は両者の区別を力説しながら、この点を論じ

ていない。いずれの場合にも「存在規定」であることにはかわりがないという内容の見解となっているのである。

上着はリンネルと等置されなければ、リンネルと「質的に等しいもの、同じ性質の物として意義をもつ」という規定は受けない。「リンネルと本質の同じもの ihr Wesensgleiches」としての上着もリンネルとの等置というかわりにおいてのみ妥当する規定である。マルクスが、上着はそういうものとしてリンネルに関係させられると言う点を拡大して、はじめからそのようなものとして前提されているのだと主張すれば、この主張はマルクスの含意とは違ったものになる。マルクスにとって、リンネルと上着との関係が質的等置の関係すなわち同等的関係であるということは、議論の前提などでは決してなかった。そのこと自体、説明の対象であったからこそ『初版』『付録』に「a 同等的関係」という項が登場したのである。『初版』『本文』ではそれをあらためて論じるという形をとっていなかったが、『現行版』の叙述は「付録」の叙述が下地となっている。「付録」の「b 価値関係」についても同様である。マルクスは、「価値形態」論では上着がはじめから価値として、はじめから価値物として等置されるとか、そのようなものとして議論の前提とされているなどと言っていない。「価値として意義をもつ」、「価値物として意義をもつ」ということ自体、やはり説明の対象なのである。上着が「同じ性質の物」、「同じ実体の物」としてリンネルに等置される、そのことが何を意味するのかという形で、「価値として」、「価値物として」意義をもつことが示されていく。

上着がリンネルと同じものであるのは、ただ両方とも価値であるかぎりにおいてのことである。だから、リ

### 価値形態論研究における混乱

ンネルが自分と同じものとしての上着に関係するということ、または、上着が同じ実体の物としてリンネルに等置されるということ、このことは、上着がこの関係において価値として意義をもつ、ということを表現している。(Ka.『初版』「付録」S.767)

この関係のなかでは、上着は、価値の存在形態として、価値物として意義をもつ。なぜならば、ただそのようなものとしてのみ、上着はリンネルと同じだからである。(Ka.『現行版』S.64)

価値(価値物)として前提されている、価値(価値物)としてはじめから等置される、等がマルクスの含意であれば、このようなまわりくどい説明は不要となってしまう。「前提されている」とか「はじめから」等とマルクスがここで言わないのは、それらがマルクスの意図するところを表わすものではないからである。

ところで、マルクスが上着のリンネルとの同等性関係を様々な表現で言う場合、たとえば、Ding von derselben Natur; Ding von derselben Substanz, Wesensgleiches; 等の表現に接して、各叙述を切り離して Natur に関する規定だとか、あるいは Substanz に関するもの、いや Wesen と言っているなどといわば読み手の都合でその規定の性格づけをするのは疑問である。質的に等しいということを種々の表現で強調していると理解すべきである。上着の「価値物」としての規定に関しても同様である。マルクスが Existenzform von Wert と言っていることを理由に、この規定を「実存」規定あるいは「存在」規定と名づけるのは疑問である。<sup>(67)</sup>

ここで詳細に論じることができないが、マルクスによる「経済学」批判の根底には「社会的な関係」と「自然



的な関係」の区別という観点がつらぬかれていた。人および物が考察の対象とされるのはそれ自体として *als solcher* ではなくそれらが属している「社会の中で、また社会によって in und durch die Gesellschaft」(Ms.『草稿』IV. S. 137) いかなるものであるのかという視点からである。すなわち「特定の社会的連関あるいは経済的形態規定性」(ebenda) が問題なのである。使用対象たる労働生産物の「価値としての規定」はこの意味で「人間の社会的な所産」(Ka.『現行版』S. 86) である。この規定は労働生産物の本性から生じるのではない。マルクスが論じているのは「物それ自体 die Dinge als solche」(Mw.『学説史』S. 127) としての労働生産物ではない。それが「商品である……といった経済的な形態規定性 *ökonomische Formbestimmtheiten, wie Ware zu sein...*」(Re.『諸結果』S. 72) が分析の対象となる。マルクスはこの点を次のように明言している。

われわれは、個々の生産物を手にとって、それが商品として含んでおりそれに商品の刻印を押すところのいろいろな形態規定性を分析する。(ebenda, S. 90)

この場合、使用価値は一般には「経済的形態規定」には属さない。「商品の形態規定はむしろ交換価値(すなわち『価値』——引用者)<sup>(14)</sup>である」(Gr.『要綱』S. 178)。つまり「価値としての規定」こそ商品の「形態規定」なのである。<sup>(15)</sup>「価値」がいかなる形態をとるかという問題とは区別されるものとして、「経済的な形態、価値そのもの die ökonomische Form, den Wert als solchen」(ebenda, S. 220) という視点が確保されなければならない。この意味では、先の上着の「価値」としての規定は「形態規定」であるとするほかはない。自然的なものと社会

価値形態論研究における混乱

的なものとの区別は「素材的規定性」と「経済的形態規定性」との区別に対応しているのであるが、「価値としての規定」が前者でないことは明白である。

以上のような意味において、上着の「価値」としての規定、言いかえれば上着の「価値物」としての規定を「形態規定」でないとする福原氏の見解は疑問とせざるをえないのである。また、この点は山内氏にも該当する。氏の見解は内容的には「価値物」は「価値」とは異なって「形態規定」なのだというものであった。言いかえれば、上着の「価値物」としての規定は「形態規定」であるが「価値」としての規定はそうではない、両者を区別せよ、というのが氏の主張であった。この点、上着の「価値」としての規定が「形態規定」でないとする福原氏と変わるところがないのである。

こうして、上着の「価値物」としての規定もしくは「価値」としての規定——正確には「価値物として意義をもつ」または「価値として意義をもつ」という規定——は、「形態規定」であるとしなければならない。ただし、すでに述べたとおり、これは等価形態にある上着に刻印される「一つの新たな形態」ではない。この「価値体」としての規定の場合は、はじめて一つの「形態」が刻印されるのではなく、まさに一つの「新たな形態」が刻印されるのである。あえて言いかえれば「新たな形態規定性」(Kr.『批判』S.34)を受けとるのである。<sup>(16)</sup>

久留間氏による今回の訂正のポイントは、氏の「回り道」論の核心をなしていた形態規定としての「価値物」規定、これが、形態規定でないとされた点にあった。「回り道」論の成否にかかわるこの訂正について、富塚氏はこの訂正を形態規定性の否定とみなし、あくまで形態規定性とすべきであるという観点から真っ向から批判した。山内氏は逆に、訂正にもとづく議論全体はやはり形態規定性という視点が貫かれているとみなし、これを評

価した。また福原氏はこの訂正を形態規定性の否定とみなし、これを批判する富塚氏をさらに批判した。三氏の見解を図式的に比較すれば次のようになる。

「価値物」を「価値体」と区別するか	久留間氏の訂正をどうみるか	マルクスの「価値物」規定をどうみるか
富塚氏 区別しない	形態規定性否定とみなし批判	形態規定とみる
山内氏 区別する	形態規定性否定とはみなさず評価	形態規定とみる
福原氏 区別する	形態規定性否定とみなし評価	形態規定とみない

三氏の見解で共通しているのは「価値としての規定」が形態規定でないという点だけである。言いかえれば、上着がリンネルとの価値関係の中で刻印される「一つの新しい形態」のみを形態規定とみなすという点で一致している。この「形態」は、富塚氏にあつては「価値物」すなわち「価値体」であり、山内氏の場合は「価値物」、福原氏の場合は「価値体」ということになる。筆者の見解は、「価値物」、「価値体」はいずれも形態規定だが後者は新たな形態規定である、というものである。<sup>(17)</sup>その現物形態が独自の役割を果たすことによって上着は一つの新たな形態規定性を受けとる。「価値として意義をもつ」、「価値物として意義をもつ」という規定は形態規定であるが、「価値体として意義をもつ」、「価値形態として意義をもつ」という形態規定はこれとは区別される新たな形態規定なのである。

### 三 むすびにかえて

久留間理論をめぐる諸研究は混沌の度を深めている。しかも現段階におけるこの混乱は、もし浅野氏の指摘が価値形態論研究における混乱

当時取り上げられていたら、まさにその時点で生じていたに違いないものである。

価値形態論研究はマルクスがいわゆる「価値表現のメカニズム」をどのように説いているかという点にかぎり、単なる不注意から生じた術語の誤解によってわき道へそれてしまった。最近軌道が修正されようとしているが正しい軌道にもどったとは言いがたい。長い回り道が終着点に向っているのであればよいが五里霧中である。最近の諸研究は久留間理論を相対化しつつある。しかしなお過去の誤謬にとらわれている。術語の解釈も恣意的で、過去に形成された各々の理論に亀裂が生じないよう手を加えるといった状態である。こうした研究状況にあつては「価値物」・「価値体」の区別の意義はやはり大きい。同一視に対する批判としての役割は終了しつつあるが、いかなる意味で区別されるかという点は絶えず吟味されていなければならない。そして従来の学説からこの区別の正否を論じるのではなく、逆にこの区別をもって現在なお支配的な過去の理論を再検討することが必要なのである。

久留間氏の訂正に対する反応として目立つのは、立場の違いはあれ辻褄を合わせる類いの議論である。つまり、氏の「回り道」論に対してはすでに正否の判断が下されていて、訂正発表後もそれは動かない。そして訂正に関してもその判断を踏み越えない範囲で論及される。しかし、こうした作業による評価あるいは批判はマルクスの叙述の曲解なしには不可能である。新旧の「回り道」論およびそれを取りまく諸見解がマルクスの理論とどのようにくい違っているかは、次号で明らかにする。

(1) 山内清氏はこの点「不明確さ」(山内「21」、四八頁)を残すと評しているが、あくまで「形態規定」とされた「価値物」が今回一度も「形態規定」とされていないのであって、「明確なものではない」(同上)とは決して言えない。

い。明確な変更である。

(2) 実際に「価値物」を「価値体」と読みあらためて（傍線部分がそうである）みれば氏の解釈は次のようになる。

ここでわれわれが何よりもまず注意しなければならないことは、……リンネルはいきなり自分、上衣に等置することによって価値形態を得ているのではなくて、まずもって上衣を自分に等置することによって上衣に価値体としての、すなわち抽象的人間的労働の直接な体化物としての、形態規定性をあたえ、そうした上ではじめて、この価値体としての定在における上衣の自然形態で、自分の価値を表現しているのだということである。（久留間〔10〕、五六頁）

一見もつともらしいこの説明は、ほかならぬ第三・第四および第五パラグラフの解説として書かれているのである。マルクスの叙述における「価値物」が「価値体」と混同されなければこのような解説——つまり氏の「回り道」論——が展開されるはずがなかったということ、これは誰の眼にも明らかであろう。これらのパラグラフには「上着の『価値体』としての規定そのものも、また、上着が『価値体』としての規定をいかにして受けとるのかという点に関する叙述も、いっさい含まれていない」（望月〔13〕、一〇一頁）からである。訂正後の「回り道」論については次号で論じる。

(3)

赤堀邦雄氏もニュアンスの違いと見る。「価値物（『価値体』といっても私は同じ内容のものを想像する。価値物よりは『価値体』の方がいささか純度が高いようなニュアンスを感じはするが）」（赤堀〔1〕、二二頁）、「価値体（価値物といっても同じだと思う）すなわち価値の化身」（同、二四頁）というようにである。両者の区別が「語感が多少異なるというようないまいなものではない」（望月〔13〕、一〇一頁）ことは拙稿で論じたとおりである。飯田繁氏は両規定を次のように並置する。「等価形態（Äquivalenzform）＝価値の現象形態（Erscheinungsform des Wertes）」をマルクスは価値の存在形態・価値物・価値体・価値鏡などの表現におきかえている」（飯田〔8〕、五）

価値形態論研究における混乱

価値形態論研究における混乱

七頁」と。研究史の現段階においては、その根拠を示さず同義と扱うのは許されないであろう。氏の論稿には「マルクスの概念規定」なる副題が付されているからなおさらである。

- (4) 植村高久氏は、今回の訂正によって『廻り道の論理』は価値体の必然論に解消された」（植村〔17〕、一五〇頁）として『廻り道の論理』は事実上崩壊したのである（同上）と指摘している。氏の見解については次号でふれる。

- (5) 「直接的な現物形態」(Ka.『初版』「付録」S.768) とただの「現物形態」とか、「手でつかめる現物形態」(Ka.『現行版』S.66) とそうでない「現物形態」、また「感覚的な現象形態」(Ka.『初版』「付録」S.767) とそうでないただの「現象形態」等々もやはり区別せよということになるのであろうか。

- (6) 武田氏は「直接的な」の有無による区別を「抽象的人間労働の実現形態」という表現にも適用する。たとえば「裁縫は人間の労働の直接的実現形態という規定においてではなく、人間の労働の実現形態という規定において織布の人間の労働としての性格の表現に役立っているのである」（武田〔15〕、三八〇頁）というように。前者は後者から「単に敷衍されるにすぎない」（同上）としても、「直接的実現形態」(Ka.『初版』S.19) はただの「実現形態」ではないというわけである。もはやこれは曲解である。使用価値が価値の現象形態になると同時にそれに含まれている具体的有用労働が「抽象的人間労働の単なる実現形態」(Ka.『初版』S.20; Ka.『現行版』S.72 usw.) になる。マルクスがこう言うとき武田氏は「単なる」は「直接的な」を意味すると主張するのであろうか。それともこれはただの「実現形態」なのか。特定の具体的労働が「抽象的人間労働の特定の實現形態または現象形態」(Ka.『初版』「付録」S.770-772) として、また特殊の等価形態にある商品に含まれているさまざまな特定の具体的な有用労働種類が「人間労働そのものの特殊な實現形態または現象形態」(Ka.『現行版』S.78) として意義をもつという場合、「直接的實現形態」ではない「實現形態」とは何なのか。そのような区別がマルクスにないことは文脈か

ら明らかである。要するに「直接的な実現形態」も、「手でつかめる実現形態」(Ka.『現行版』S.73)、「感覚的な現象形態」等の場合と同様、修飾語の有無を論じても無意味なのである。誤解をまねくマルクスの術語は整理して使うべきだという趣旨であれば別に問題はないが、マルクスがあたかも内容的に区別して論じているかのとき主張は、事実と反すると言うほかはない。ある使用価値上着が「価値の現象形態」になるのはリンネルが「抽象的人間労働の直接的実現形態」(Ka.『初版』S.19)としての具体的労働裁縫に関係することよつてのみ(vgl. ebenda)という論点と、上着が「価値体」として、したがって単なる人間労働の物体化 Verkörperung (Ka.『初版』「付録」S.771)として意義をもちうるのは、裁縫労働が「それにおいて抽象的人間労働が実現される場所の特定の形態」(ebenda)すなわち「抽象的人間労働の特定の實現形態または現象形態」として意義をもちがりにおいてのみ(vgl. ebenda)という論点と、いったい何が違うのであろうか。

(7) マルクスは等価形態の第二の特性について、具体的労働がその反対物たる「抽象的人間労働になる」(Ka.『初版』「付録」S.770)とも、また「抽象的人間労働の現象形態になる」(Ka.『現行版』S.73)とも言う。どちらも同じ内容を言い表わしているということは、前後の叙述を読めば明らかとなる。文脈を無視してこれを「混乱」あるいは「混同」とか、内容変更などと評せば、マルクスは啞然とするに違いない。

(8) 「上着はリンネルの価値表現においては価値体として意義をもち、したがって、上着の物体形態または現物形態は、価値形態として、すなわち、無差別な人間労働の、単なる人間労働の、物体化 Verkörperung として、意義をもつ」(Ka.『初版』「付録」S.770)。このような場合の「物体化」が単なる「凝固」とか「対象化」を意味しないことは言うまでもない。もしそれが単なる「対象化」であれば、上着をつくる具体的労働、裁縫が抽象的人間労働の「実現形態または現象形態として意義をもつ」とすることはできないであろう。「価値形態」論の中で用いられている抽象的人間労働の「物体化 Verkörperung」という術語については、とくに問題はない。「物質化 Ma-

価値形態論研究における混乱

## 価値形態論研究における混乱

teriatür」という術語については注意を要する。

マルクスはシステムの「生産的労働」に於て次のように言っていた。「商品という概念は、労働がその生産物に物体化され、物質化され、実現されている sich die Arbeit verkörpert, materialisiert, realisiert in ihrem Produkt」ということを含んでいる。……けれども労働の物質化等々 Das Materialisieren etc. der Arbeit や、A・システムがとらえているようにスコットランド人的にとらえるべきではない。われわれが労働の物質化としての商品 Ware als Material der Arbeit について——その交換価値の意味におおづ——語る場合には、この自己は、商品の想像的な、すなわち単に社会的な、存在様式にすぎないのであり、これは商品の物体的な現実性 ihrer körperlichen Realität とはなんの関係もない」(Mw. 『学説史』I. S. 141; Ms. 『草稿』II. S. 457)。マルクスは労働がある物に「固定され、物質化される fixiert, materialisiert ist」(ebenda, S. 134; ebenda, S. 450)「ある物に物質化される固定される sich in einem Ding materialisiert, fixiert」(ebenda, S. 135; ebenda, S. 451)と言っているのだが、これはシステムの「固定し実現する fix or realize」(Wealth of Nations, I, Glasgow ed., p. 330)を言いかえたものである。しかしマルクス特有の表現というわけではない。たとえば W・アンペンダーは1820年代に労働を「固定し物質化する」としつつも、“The non-producer then possesses the means of acquiring by labor and subsequent exchange what the producer has to spare. Having failed to produce it by his own industry, and not perhaps having the skill for the peculiar industry in question, he can in some other mode fix or materialize his labor so as to produce some article of desire to serve as an equivalent.” (William Thompson, *An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth*, London 1824, rpt. New York 1963, p. 97) として1840年代前半の W・K・ヘスの書に (vgl. Moses Hess, *Philosophische und Socialistische Schriften 1837—1850*, rpt. Vaduz, Liechtenstein 1980, S. 219) 以下のように、直接労働に関わらず



いが fixieren・verkörpern・materialisieren が並置されて使われている。しかし、そもそもマルクスらがこれらを使用するようになったのはヘーゲルの影響であろう。ヘーゲルは『エンチクロペディー』の第二篇「自然哲学」の中で materialisieren・Materialisieren・Materiatur 等の言葉を多用し、また fixieren と materialisieren を対にして使用している (vgl. G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie*, Werke 9, Suhrkamp Verl. Frankfurt am Main 1970, S. 107, 109, 184, 189, 196—7, 225, 249—50, 276—7, 336 usw.; *Wissenschaft der Logik*, Werke 6, S. 90 usw.)。興味深いのは、労働が「物質化 materialisieren する」、労働の「物質化 Materiatur」等の概念がどのような経緯でマルクスの経済学の中に根をおろしていったのか、ということである。それらは「対象化」とつねに同義とされていたわけではない。使用価値としての労働生産物と価値としての労働生産物をマルクスは次のように区別して言っている場合もあった。すなわち前者が「特定の有用労働の物体化 Verkörperung」であるのに対し後者は「一般的社会的な労働の物質化 Materiatur」(Re. 『諸結果』S. 36) であると。こうした区別が全著作あるいは『資本論』に貫かれているわけではない。労働の「物質化 Materiatur」および「物体化 Verkörperung」という術語をマルクス独自の労働価値論の形成との関連において位置づける作業が必要であろう。

(9) 最近の論稿では『「価値体」範疇』、『「価値物」範疇』あるいは『「価値物」概念』といった表現がよく使われる。

「価値物」・「価値体」の区別が単なる言葉使いの問題、ニュアンスの違いの問題でないことは浅野氏が指摘しておりであった。氏は両者を単なる「言葉」でなく「範疇」であるとして(浅野「4」一七四頁参照)、両者の違いを「範疇」としての区別、「概念的区別」(同「一五四頁」として強調したのであった。無批判的な同一視が支配的な状況にあつてはむしろ適切であったかもしれない。最近の論調に見られる安易な使用には問題がある。両者は「範疇」ではないからである。マルクス経済学なるものを想定すれば別であるが、少なくともマルクスにとっては「範疇」ではなく「術語 termini technici」(Ka. 『現行版』S. 231)「私(マルクス——引用者)がつくった術語

価値形態論研究における混乱

## 価値形態論研究における混乱

die von mir geschaffene Terminologie」(ebenda, S. 11) である。つまり分析者たるマルクスが命名し使用する術語なのである。「必要労働」、「剰余労働」、「剰余価値率」、「不変資本」、「可変資本」等はみなマルクスが「私は……と云々 ich nenne」、「われわれが……と呼び wir nennen」としてそのように命名したものである。これに対し「範疇」はそのようなものではない。マルクスはこう言う。「経済学的諸カテゴリーは、社会的生産諸関係の理論的表現、その抽象であるにすぎない」Les catégories économiques ne sont que les expressions théoriques, les abstractions des rapports sociaux de la production」(K. Marx, *Misère de la philosophie, fac-similé*, Tokyo 1982, p. 99, 邦訳『全集』第四巻「一三三頁」と。ブルジョワ的諸関係の理論的表現である「ブルジョワ経済学の諸範疇」はこの意味において「この歴史的に規定された社会的生産様式の、商品生産の、生産関係についての社会的に認められた」、つまり客観的な思想形態 gesellschaftlich gültige, also objektive Gedankenformen」(Ka. 『現行版』S. 90)。「客観的な真理をもつ悟性形態 des formes de l'intellect qui ont une vérité objective」(Ca. 『フランス語版』p. 30)なのである。こうした「諸範疇」からなる経済学の「転倒性 Quid pro quo」が現実の世界における事態の「転倒性 Quid pro quo」を反映したものであるからこそ、マルクスは『資本論』を「経済学批判」としたのである。この意味において、「範疇」は単なる術語、単なる用語では決していない。「事柄がねじまげられている」(Ka. 『現行版』S. 72) 価値表現の仕組みをいかに説くかを工夫する過程でマルクスによって造り出された術語 die von Marx geschaffene Terminologie は「範疇」ではないのである。『価値体』『範疇』、『価値体』『概念』ならきこえはよいが、『価値肉体』『範疇』、『価値肉体』『概念』はこまる、といった瑣末な問題ではない。便宜上「範疇」という言葉を使うというのであればそれもよいが、「価値物」・「価値体」の区別が一般に認められるようになった昨今、この言葉が反省なしに気軽に使われているように思われる。「範疇」とは何かということとは、マルクスの「経済学批判」の方法の根幹にかかわる問題である。この点に絶えず注意を喚起しつつ論を進め

ていく渡辺昭氏の一連の論稿（渡辺「18」(2)、六八頁、(8)、五四―五頁等参照）は学ぶべき点が多い。

- (10) 同じく「はじめから価値物」と言っても、井上周八氏（井上「9」）および松石勝彦氏（松石「12」）と武田信照氏（武田「15」）とは久留間氏に対する批判の視点はまったく異なる。前二者は「はじめから価値」としてという意味であり、後者は「はじめから価値姿態」としてという意味である。この点は拙稿（望月「13」、一二―三頁）を参照されたい。

- (11) 山内氏の論稿では「表現する」と「示す」とが区別されている。おそらく氏の用法では、後者は当事主体が「眼に見える sichtbar」（Ka.『現行版』S. 81）か、<sup>た</sup>ちで「眼前に見いだす vorfinden」（ebenda, S. 107）ことを言い表わすものでなく、分析者の眼がとらえる——そして概念的に把握する——事態を指していると思われる。これはきわめて重要な問題提起であるが、ここでふれることはできない。稿をあらためて論じる予定である。

- (12) 「価値物」と「価値体」と同一視してきた諸見解は、商品は「価値物」としては……つかまえない unfassbar」（Ka.『現行版』S. 62）という条りを、次のように解釈していたことになる。商品は「価値体」としてつかまえない、つまり手をつかめるような価値としてはつかまえない、と。これは同義反復である。山内氏の「価値物」も同様ではないかと思われる。

- (13) 商品は実在的には使用価値であり、「その価値存在 ihr Wertsein」（Ka.『現行版』S. 119）は価格においてただ観念的に現われている。マルクスはこれを『初版』では「価値存在 ihr Wertsein」でなく「価値定在 ihr Werth-dasein」（Ka.『初版』S. 64）と言っていた。この書きかえを「存在」規定の「定在」規定への変更であると言えばマルクスは苦笑するであろう。マルクスにとってこれは内容的な変更などではなく同じ内容をいかに表現するかという問題だからである。

なお、ついでながら、富塚氏はマルクスが Existenzform von Wert と言う場合「その《Existenz》はは《Dasein》」価値形態論研究における混乱

## 価値形態論研究における混乱

と同義とされます」(富塚 [16]、三三三頁)と、「《Wertding》と《Wertsein》とが対概念」(同上)であることを強調する。つまり、氏の見解によれば Wertsein と Wertdasein との区別こそ価値と価値形態との区別に対応することになる。氏にとつては Wertdasein は unmittelbares Wertdasein と同義なのである(同、三三三四頁参照)。したがって富塚氏に従えば、Wertdasein の Wertsein への書きかえはありうべからざることだということになるであろう。なお「価値の存在形態」の意味については山本氏の論稿(山本 [19])および拙稿(望月 [13])を参照されたい。

- (14) 周知のとおり『経済学批判要綱』執筆期のマルクスは「価値」の意味で「交換価値」という範疇を用いていた。しかし「価値」と「価値形態」の区別がなかったわけではない。この時期のマルクスは、「交換価値」と「交換価値の形態」(Gr.『要綱』S.171)という仕方で両者を区別していた。前者と「交換価値の自立性が手にとるように存在している形態」(ebenda)を意味する後者との区別は明白である。

- (15) 商品は個人的消費過程に入ることによってその使用価値を失うのと同時に「その価値を失う」(Ka.『現行版』S.217)、『要綱』でのマルクスはこれを「その交換価値を、一般にその経済的形態規定性を失った」(Gr.『要綱』S.218)としていた。

- (16) 使用対象たる金の商品としての規定は「形態規定」であるが、金の貨幣としての規定もまた「形態規定」である。しかし後者は前者すなわち「単なる商品としての金には属していない形態規定」(Ka.『初版』S.64)である。

- (17) この点武田氏の見解は筆者のそれと近いと思われるが、なお微妙である。武田氏は上着だけに「特定の経済的規定性が与えられている」(武田 [15]、三七四頁)と言う。また「特定の規定性」(同、一七四頁)とも言う。氏はかつて、「価値物」を「等価物とはその自然形態が価値形態になっている価値物を指している」(同、三三一頁)、「自然形態が価値をあらわす価値物」(同、三三二頁)という仕方で用いていた論稿で、次のように述べていた。

すなわち、上着は「たんに無規定なものであるとしてリンネルに等置されるのではなく、つねに『等価物として』『価値物として』『価値として』、あるいは『質的に等しいものとして』『等置されるのである』(同、三三七頁)と。この点は訂正後も変わりがない。「私が強調したのは、リンネルは上衣と関係する際上衣を経済的に無規定なものとしてではなく、つねに『価値として』『価値物として』『自分に等置するのだということであった』(同、三七三頁)というようにである。したがって、武田氏は「価値」または「価値物」と「価値体」とはいずれも「経済的規定性」としていることになる。これが「経済的形態規定性」を意味しているとすれば、筆者と一致することになるう。

〔注記〕

本稿におけるマルクスの著作からの引用は次の略号を用いる。なお訳文には随時原文を挿入してある。Werke./ Karl Marx-Friedrich Engels-Werke, Berlin 1956—1968. Gr. 『要綱』/Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Berlin 1953 (1974). 『経済学批判要綱』。Kr. 『批判』/Zur Kritik der politischen Ökonomie, In: Werke, Bd. 13. 『経済学批判』。Mw. 『新説』/Theorien über den Mehrwert, In: Werke, Bd. 26, 1—3. 『剰余価値学説史』。Re. 『諸結果』/Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses, Frankfurt 1969. 『直接的生産過程の諸結果』。Ms. 『草稿』/Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861—1863), In: Karl Marx-Friedrich Engels-Gesamtausgabe, Abt. 2, Bd. 3, Teil 1—6, Berlin 1976—1982. 『資本論草稿集』。Ka. 『現行版』/Das Kapital, Bd. 1, In: Werke, Bd. 23. 『資本論』第一巻。Ka. 『初版』/Das Kapital, Bd. 1, Hamburg 1867 (rpt. Tokyo 1959). 『資本論第一巻初版』。Ca. 『フヒンズ語版』/Le Capital, Paris 1872—1875 (rpt. Tokyo 1967). 『フヒンズ語版資本論』。

価値形態論研究における混乱

引用文献

赤堀 邦雄〔1〕

『相対的価値形態の内実は何を説明しようとしているのか——武田信照氏に対する反批判として——』、『経済系』（関東学院大）第一三二集。

荒木 勉夫〔2〕

『資本論』と価値論、啓文社、昭和五十七年。

浅野 敏〔3〕

『価値形態』に関する一考察、『経済理論』（和歌山大）第一二二号。

〔4〕

『個別資本理論の研究』、ミネルヴァ書房、昭和四十九年。

藤本 義昭〔5〕

『価値表現の秘密について——『相対的価値形態の内実』の解釈を中心に——』、『大阪市大論集』第三〇号。

福原 好喜〔6〕

『価値物』ならびに『価値体』範疇について——富塚及び藤本氏の所説に寄せて——、『駒沢大学経済学論集』第一三卷第三号。

廣松 渉〔7〕

『資本論の哲学』、現代評論社、昭和四十九年。

飯田 繁〔8〕

『商品・貨幣・資本——マルクス概念規定(2)——』、『岐阜経済大学論集』第十三卷第三号（『商品と貨幣と資本』、ミネルヴァ書房、昭和五十六年に所収）。

井上 周八〔9〕

『価値形態論』論争、『経済学研究』（立教大）第二四卷第二号。

久留間敏造〔10〕

『価値形態論と交換過程論』、岩波書店、昭和三十七年。引用は第十五刷より。

〔11〕

『貨幣論』、大月書店、昭和五十四年。

松石 勝彦〔12〕

『独占資本主義の価格理論』、新評論、昭和四十七年。

望月 俊昭〔13〕

『価値形態』に関する一考察——等価物の『価値体』としての規定について——、『成城大学経済研究』第六七号。

関根猪一郎〔14〕「久留間鮫造著『貨幣論』の価値論論争における地位(上)・(下)」、『経済と経済学』第四九—五〇号。

武田 信昭〔15〕『価値形態と貨幣』、梓出版社、昭和五十七年。

富塚 良三〔16〕「価値表現の『回り道』の論理と交換過程の矛盾——久留間鮫造著『貨幣論』によせて——」、講座・資本論の研究〔2〕、青木書店、昭和五十五年。

植村 高久〔17〕「貨幣把握の核心——価値と直接的交換可能性——」、『経済評論』(日本評論社) 昭和五十六年四月号。

渡辺 昭〔18〕「価値と生産価値(2)、(8)」、『経済理論』(和歌山大) 第一三四号、第一六〇号。

山本広太郎〔19〕「単純な価値形態について——価値、その実存と現象——」、『経済学雑誌』(大阪市大) 第七六卷第三号。

〔20〕「価値物⇌価値の実存形態⇌価値体⇌価値の現象形態——価値表現の回り道——」、『経済理論学会年報』第一五号。

山内 清〔21〕「価値表現の『回り道』について——『価値物 Wertding』の意義——」、『経済学研究』(東大) 第二三三号。